

修理完成記念 特別公開 興福寺伝来の四天王像

この四天王像は明治39年(1906)まで興福寺こうふくじに伝来した一具で、広目天こうもくてんがいまも興福寺に残るほかは、持国天じこくてんが滋賀・MIHO MUSEUM、増長天ぞうちょうてんと多聞天たもんてんが当館所蔵となっています。増長天と多聞天は明治時代の修理から100年あまりが経過し、表面彩色さいしきの浮き上がりや過去の修理箇所の変色が目立つ状態にあったため、昨年度、バンク・オブ・アメリカの助成を受けて剥落止めや古色修整はくらくど こそくしゆせいを主とする保存修理を実施しました。このたび、面目を改めた増長天と多聞天を仏像館で特別公開するとともに、平成9年(1997)の特別展「奈良国立博物館の名宝 ― 一世紀の軌跡 ―」から28年ぶりに四天王像が一堂に会します。



廣目天



多聞天



増長天



持国天



増長天と多聞天の保存修理

明治時代の古写真に写る興福寺四天王像

明治39年(1906)に興福寺で撮影された古写真[図1]には、四天王像(広目天をのぞく)の姿が写る。この古写真は、撮影直後に同寺を離れて益田孝(鈍翁 1848~1938)に譲渡された破損仏を写したもので、快慶作の弥勒菩薩像(ボストン美術館蔵)や梵天・帝釈天像(サンフランシスコ・アジア美術館蔵)、如来像(クリーブランド美術館蔵)などが認められることでも知られていた。

明治時代の修理

四天王像のうち広目天をのぞく3軀は、古写真の時点では頭体の組み合わせに関して現状とのあいだに相違があるが、その後修正がなされた(①は頭部が多聞天像のもので、体部が持国天像のもの。②は頭部が増長天像のもので、体部が多聞天像のもの。③は頭部が持国天のもので、体部が増長天像のもの)。いずれも少なからず損傷が認められ、古写真には両腕が写らないが、現状3軀には造立当初の腕(各所に補修あり)が付属していることから、撮影時には別置されていたとみられる。

持国天は像内に貼紙があり、明治41年に「大仏師 竹内久一」、「大漆工彩色 伊東乾谷貞文」により修理されたことが判明する。増長天と多聞天の修理を伝える記録は知られないが、前年の明治40年3月に鈍翁を会主として自邸・碧雲台(現在の東京都品川区北品川の御殿山に建設)で催された第12回大師会においてともに展覧されていることから(『大師会々記』)、このときまでには修理が終えられたと考えられる。

令和6年度の保存修理

明治時代の修理から100年あまりが経過している増長天と多聞天は、ともに表面の彩色や下地に経年の劣化による浮き上がりが見られ、増長天の面部や両像の甲は過去の修理箇所の変色が目立つ状態にあり、さらに各所に木材の割れや木屎漆¹の劣化に起因すると推測される亀裂が生じていた。

このたびの保存修理では、はじめに表面のクリーニングをおこない、つづいて彩色や下地の経年劣化による浮き上がりは、ふのり膠²などを用いて剥落止めをおこなった[図2]。各所にみられた過去の修理箇所の変色は、周囲になじむように修整した[図3]。さらに木材の割れや木屎漆の劣化による亀裂、虫食い箇所のうち損傷が移行するおそれのあるところは、樹脂に木粉などを練り合わせたものを用いて補修した[図4]。増長天の台座天板は収縮と反りによる矧目³の亀裂、目違い⁴、干割れ等が生じていたが、すき間に樹脂を挿し入れて接着し、表面を木屎漆で整えた。

*1 木 屎 漆：繊維屑や木粉などを漆糊で練り合わせたもの。損傷部や接合部の充填剤・接着剤とされるほか、仏像の表面の成形にも用いる。

*2 ふのり膠：海藻由来のふのり(布海苔・布糊)と膠を混ぜ合わせて作る溶液。主に接着剤として用いられる。

*3 矧 目：木材の接合部のこと。

*4 目 違 い：ふたつの木材を継ぎ合わせたときに生じるずれ。



[図1] 古写真 奈良・興福寺



[図2-1]
増長天 左頬ほおの剝落止め
処置前(左) 処置後(右)



[図2-2]
多聞天 左袖の剝落止め
処置前(左) 処置後(右)



[図3-1]
増長天 右腰甲ようこうの変色の修整
処置前(左) 処置後(右)



[図3-2]
多聞天 兜鍪かぶとの変色の修整
処置前(左) 処置後(右)



[図4-1]
増長天 背面甲締具こうしめぐの亀裂補修
処置前(左) 処置後(右)



[図4-2]
多聞天 腹部表甲はらてこうの亀裂補修
処置前(左) 処置後(右)

解説

①重要文化財 持国天立像 滋賀・MIHO MUSEUM

②重要文化財 増長天立像 当館

③重要文化財 広目天立像 奈良・興福寺

④重要文化財 多聞天立像 当館

木造 彩色 像高①170.7cm ②163.2cm ③157.4cm ④155.5cm 平安～鎌倉時代(12～13世紀)

制作時期

この四天王像は、造立当初の安置堂宇は不明ながら興福寺に伝来した優品としてつとに知られている。4軀とも体幹部を一木から彫り出した体軀には充実感がみなぎり、瞳に黒光りする異材を使用し、広目天の邪鬼を塑土で成形するなど、しばしば古様と評される奈良時代や平安時代前期にみられる技法を用いる点に特色がある。

一方で、いくぶん硬さを残しながらも躍動感ある姿勢や、肉付きのよい迫真の忿怒相、甲の各部に木製ないし銅製の装飾を取り付ける技法は、12世紀後半から13世紀初頭の奈良仏師や慶派仏師の作例、具体的には東大寺所蔵(内山永久寺旧蔵)持国天像・多聞天像や文治5年(1189)康慶作の興福寺南円堂四天王像を想起させるところがある。こうした新旧要素の併存がこの一具の魅力ともなっているが、それゆえに制作時期については11世紀から13世紀初頭まで諸説あり、いまだ定説をみない。

構造と技法

このたびの保存修理に先だち実施した調査では、とくに構造や技法に関して今後の研究に資するさまざまな情報が得られた。用材について、従来4軀ともヒノキないしカツラ、あるいは広目天のみカツラとする説があったが、目視で観察するかぎり4軀いずれもヒノキとみられる針葉樹材を用いていると判断された。構造や保存状態を把握すべく実施したX線CTスキャン調査では、体幹部材は木心を像内に込めており(多聞天のみ像背に木心がかかる)、それぞれ内部を削り貫いたうえで持国天・広目天・多聞天の3軀は首の付け根で頭部を一旦割離し(増長天は頭体別材製)、背部に別材を当てていることが確認された。一部の表面にほどこされた木屎漆は、各所に生じた干割れを補修するための処置のようで、また甲の覆輪*1の一部には乾漆*2を盛り上げての成形が認められた。なお、多聞天のみ両腕を蟻柄*3で接合し、両脚の脛半ばで接合面を鉤の手状にして脛以下に別材を矧ぎ、像本体と木目が近似する縦木で邪鬼を造るなど、他の3軀にはみられない独特の造法を用いる点が注目された。

4軀の瞳は、CT調査および蛍光X線分析の結果、頭部が半球形で先端が針状に尖った銅製の鉸を挿し込んでいることが判明した。また、各像の表面は薄橙色の下地の上に彩色をほどこしており、彩色文様は暈縹*4を用いた植物文や幾何学文が主体で、金泥を用いた文様も各所にみられるが、切金文様は認められなかった。暈縹彩色の輪郭は赤色の線で描き起こしている。

古様な技法をさまざまに駆使する一方で、4軀の作風は前述の東大寺持国天像・多聞天像や興福寺南円堂四天王像と類似するところがあり、別材製の装飾もこれらの作例から顕著にみられるものである(武笠朗「興福寺他分蔵の四天王像について」『美術史における転換期の諸相』科研基盤研究(B)研究成果報告書、2015年)。表面の薄橙色の下地は南円堂像にもみられ、暈縹彩色の赤色の輪郭線は鎌倉期にもしばしば類例が見出せる。制作時期については依然として未解明だが、増長天と多聞天の保存修理を経て4軀が一堂に会する今回の特別公開が多くの人びとにとってこの四天王像の魅力に触れる機会となり、本一具をめぐる研究がますます進展することを願ってやまない。

増長天と多聞天の保存修理はバンク・オブ・アメリカの助成を受けた。施工は公益財団法人美術院が担当し、梅村哲史、大島健太郎、小廣篤の各氏よりさまざまな教示を受けた。

*1 覆輪：甲の縁に金属などの別材をかぶせ、補強や飾りとしたもの。

*2 乾漆：木や土などの原型の上に、麻布を漆で何層にも覆い重ねて固める技法。

*3 蟻柄：木材の先端を他の木材にはめ込むため、凸形の突出部を鳩の尾状に広げたもの。

*4 暈縹：装飾文様における彩色方法のひとつ。ひとつの色を暈かすのではなく、段階的に濃淡をつけて彩色する技法で、こんにちのグラデーションにあたる。

解説 山口 隆介(奈良国立博物館学芸部文化財課美術工芸室長)

写真 西川 夏永(同資料室員) ※広目天、興福寺古写真をのぞく修理中の部分写真は公益財団法人美術院より提供を受けた

修理完成記念 特別公開 興福寺伝来の四天王像

仏像館 名品展「珠玉の仏たち」 令和7年(2025)12月23日(火)～令和8年(2026)3月15日(日)

編集・発行 奈良国立博物館



持国天立像 滋賀・MIHO MUSEUM



増長天立像 当館



広目天立像 奈良・興福寺



多聞天立像 当館